

個人研究

## 『通俗仏教：世諺百話』の研究

文学部教授 東 森 勲

### 1. 『通俗仏教：世諺百話』（守本恵観著、明治40（1906）年初版 法文館発行）

本書は、世俗のことわざを取り上げて、仏教の見地から、広く一般読者にむけて説いた教訓書である。

序文によれば、「古来世に慣用せる諺の、百種を撰び、之に註解を附して、刊行するに、和解の平易俗言なるは、普く人々に通じ、觀易からんことを旨とし、ひろく大悲憐心の、慈悲に浴」（守本1906：序2）すことを願って、古来、慣用されていることわざをやさしく、註解を加え、まとめたものである。収録されたことわざは総数100。解説文は、短いものは、「四 後の百より今の五十」のように2ページ弱（守本1906：10-11）「七 さはらぬ神に祟りなし」（守本1906：16-17）、長いものは「五十二 仇を恩で報ずる」（守本1906：113-119）の7ページにわたるものもある。問題は、ことわざの記載の順序などには、規則性がなく、著者の好みで並べられているようである。今では、慣用表現でことわざとは言わないようなものなどをその中に含んでいる。たとえば、「三十一 食わず嫌い」（守本1906：65-67）「五十四 極楽とんぼ」（守本1906：121-123）「百 大事の大事のお月さんを黒んぼが隠して赤んぼが月出た」（守本1906：217）。

仏教の教理や仏典などを中心にした、古典籍を引用し、末尾に著名な仏教者の道歌（釈教歌）・古歌を付している。引用される書目には、『阿弥陀經』『涅槃經』『金剛教』などの仏典以外にも、『論語』『平家物語』『徒然草』などさまざまな書を参照するほか、聖徳太子の御和讃（二 袖の振れ合ふも多生の縁（守本1906：3-5））、大神宮の託宣（四 後の百より今の五十（守本1906：10-11））、後鳥羽法皇の御詞（三十二 光陰は矢の如し（守本1906：67-69））、伊達政宗の逸話（五十二 仇で恩を報ずる（守本1906：113-119））、空也上人（八 身を捨てこそ浮む瀬もあれ（守本1906：17-19））、無住上人（三十六 猫に小判（守本1906：75-77））、など、本書は、仏教の唱導（説教）の伝統を踏まえて、ことわざを広く庶民のために書いたものといえる。（参考 北村孝一ほか（2005：2-3）『ことわざ資料叢書第3集第6巻』クレス出版）

## 2. 本論文の構成

出版当時（明治40年1906年）、一般に使用されていた仏教にかかわることわざ100の分析を、現代の日本語、英語のことわざと比較して、研究することが本研究の目的である。

明治期の通俗仏教のことわざには、大きくわけて3つのタイプがある。

タイプ1：現代のことわざと変わらないもの：

七 さわらぬ神に祟りなし（守本1906：16-17）

九 身から出た錆（守本1906：19-22）

三十二 光陰は矢の如し（守本1906：67-69）

タイプ2：現代のことわざと異なるもの：

八十四 馬の耳に風（守本1906：185-187）（→〈現代のもの〉馬の耳に念仏）

二十二 十人寄れば十腹（守本1906：43-46）（→〈現代のもの〉十人十色）

一 一を以て萬を知る（守本1906：1-3）（→〈現代のもの〉一を聞いて十を知る）

タイプ3：現代では対応するものがないもの：

三十九 今のは念仏誰も唱へる（守本1906：83-85）

二十四 百日の説法屁一つ（守本1906：50-52）

四 後の百より今日の五十（守本1906：10-11）

本研究では特にタイプ2ではことわざの通時的変化がなぜ生じたかを分析する。またタイプ3では、なぜ現代のことわざには対応物がないのか、また現代のことわざでも、あまり使用頻度の低いものなどがでてくるので、なぜこのようにことわざがすたれ使用されなくなったかを、『岩波ことわざ辞典』（2000、時田昌瑞著）『岩波いろはカルタ辞典』（2004、時田昌瑞著）『辞書から消えたことわざ』（2014、時田昌瑞著、角川新書）などとも比較しながら研究する。

英語でのことわざについても、日本語と同様に、おなじく消えつつあることわざがどのようにになっているかをデータ収集し、検討する。これらの比較によって、仏教に由来することわざの時代による変化を調査研究することになる。

## 3. 『通俗仏教：世諺百話』（守本恵観著、明治40（1906）年初版 法文館発行）

1. 一を以って萬を知る
2. 袖の振り合ふも多生の縁
3. 命は食にあり
4. 後の百より今の五十

5. 味噌の味噌臭さは上味噌にあらず
6. 叶わぬ時の神たのみ
7. さわらぬ神に崇なし
8. 身を捨てこそ浮む瀬もあれ
9. 身から出た錆
10. 十分はこぼるる
11. 獅子身中の蟲
12. 麻に連る蓬
13. 葬礼すみて医者ばかり
14. 九牛が一毛
15. 昨日の淵は今日の瀬となる
16. 酒は百薬の長
17. 柳に雪折れなし
18. 油断大敵
19. 何にもかも知りて赤子となる聖
20. 水に書をかくが如し
21. 十人寄れば十腹
22. 人の身振り見て我が振り直せ
23. 人に一癖
24. 百日の説法屁一つ
25. 一文惜しみの百知らず
26. 蒔かぬ種は生きへぬ
27. 来年のことをいはば鬼が笑う
28. 一寸先は闇の夜
29. 転ばぬ先の杖
30. 子を持ちて知る親の恩
31. 食わず嫌ひ
32. 光陰は矢の如し
33. 後生大事や金ほしや死んでも命のあるやうに
34. 善は急げ
35. せいては事を仕損じる
36. 猫に小判
37. 運は天にあり
38. 番町に居て番町知らず

39. 今はの念仏誰も唱へる
40. 金持と灰吹は溜まる程きたない
41. なるはいやなり思ふはならず
42. 金言耳に逆う
43. 熱さ忘れて影忘る
44. 地獄の沙汰も金次第
45. 後悔臍を噛む
46. 心の鬼が身責る
47. 故郷へ錦を飾る
48. 過ちては改まるに憚る勿れ
49. 会うは別れの始め
50. 命が物種
51. 恩を仇で報ずる
52. 仇を恩で報ずる
53. 画餅飢に充たず
54. 極楽とんぼ
55. 驕るもの久しからず
56. 魚ごろあれば水ごろあり
57. 可愛い子には旅をさせよ
58. 思ひ内にあれば色外に形はる
59. 情けは人の為ならず
60. ならぬ堪忍するが堪忍
61. 月にむら雲花に風
62. 楽しみは苦しみの基
63. 立鳥も跡を濁さず
64. 宝の山に入りて空しく帰る勿れ
65. 流れを汲みて水上を知る
66. 宵工みの朝寝ほう
67. 欲には目なし
68. 金持の貧乏人貧乏人の金持
69. 桃栗三年柿八年
70. 泥中の蓮
71. 渴に臨みて井を掘る
72. 蛙の面に水

73. 禍は口より起こる
74. 笑ふ門には福来る
75. 濡れぬ先の傘
76. 我身抓りて人の痛さを知れ
77. 地獄で仏
78. 井の中の蛙大海を知らず
79. 飛んで火に入る夏の虫
80. 問ふは当座の恥問はねば松代の恥
81. 玉に瑕<sup>きづ</sup>
82. 論語読みの論語知らず
83. 塵が積れば山となる
84. 馬の耳に風
85. 牛は牛連れ馬は馬づれ
86. 知らんが仏
87. 稼ぐに追付貧乏なし
88. 負うた子に教へられて浅瀬に渡る
89. 万能足りて一心足らず
90. 親の心子知らず
91. 瓜の蔓には茄子はならぬ
92. 仏を造り眼を入れず
93. 念力岩をも通す
94. 命にかへる宝なし
95. 天知る地知る
96. 胡椒丸呑み
97. 身に余る嬉しさ
98. 遭ふた時肩ぬげ
99. 芥子の中に須弥山あり
100. 大事の大事のお月さんを黒んぼが隠して赤んぼが月出した

割田剛雄（2012）〈『通俗仏教：世諺百話』で割田（2012）にあるものはページを付した〉

101. 一を以って萬を知る（X）〈（X）は対応するものがなしの意〉
102. 袖の振り合ふも多生の縁（袖すりあうも他生の縁） p. 157
103. 命は食にあり（X）
104. 後の百より今の五十（X）

105. 味噌の味噌臭さは上味噌にあらず (X)
106. 叶わぬ時の神たのみ (X)
107. さわらぬ神に崇なし (X)
108. 身を捨てこそ浮む瀬もあれ (X)
109. 身から出た錆 p. 217
110. 十分はこぼるる (X)
111. 獅子身中の蟲 (X)
112. 麻に連る蓬 (X)
113. 葬礼すみて医者ばかり (X)
114. 九牛が一毛 (X)
115. 昨日の淵は今日の瀬となる (X)
116. 酒は百薬の長 (X)
117. 柳に雪折れなし (X)
118. 油断大敵 (X)
119. 何にもかも知りて赤子となる聖 (X)
120. 水に書をかくが如し (X)
121. 十人寄れば十腹 (X)
122. 人の身振り見て我が振り直せ (X)
123. 人に一癖 (X)
124. 百日の説法屁一つ p. 205
125. 一文惜しみの百知らず (X)
126. 蒔かぬ種は生きへぬ (X)
127. 来年のことをいはば鬼が笑う (X)
128. 一寸先は闇の夜 (X)
129. 転ばぬ先の杖 (X)
130. 子を持ちて知る親の恩 (X)
131. 食わず嫌ひ (X)
132. 光陰は矢の如し (X)
133. 後生大事や金ほしや死んでも命のあるやうに (後生大事 p. 120)
134. 善は急げ (X)
135. せいては事を仕損じる (X)
136. 猫に小判 (X)
137. 運は天にあり (X)
138. 番町に居て番町知らず (X)

139. 今のは念仏誰も唱へる (X)
140. 金持と灰吹は溜まる程きたない (X)
141. なるはいやなり思ふはならず (X)
142. 金言耳に逆う (X)
143. 熱さ忘れて影忘る (X)
144. 地獄の沙汰も金次第 p. 137
145. 後悔臍を噛む (X)
146. 心の鬼が身責る (X)
147. 故郷へ錦を飾る (X)
148. 過ちては改まるに憚る勿れ (X)
149. 会うは別れの始め (会うは別れのはじめ p. 9)
150. 命が物種 (X)
151. 恩を仇で報ずる (X)
152. 仇を恩で報ずる (X)
153. 画餅飢に充たず (X)
154. 極楽とんぼ (X)
155. 驕るもの久しからず (X)
156. 魚ごろあれば水ごろあり (X)
157. 可愛い子には旅をさせよ (X)
158. 思ひ内にあれば色外に形はる (X)
159. 情けは人の為ならず (情けは人のためならず p. 192)
160. ならぬ堪忍するが堪忍 (X)
161. 月にむら雲花に風 (X)
162. 楽しみは苦しみの基 (X)
163. 立鳥も跡を濁さず (X)
164. 宝の山に入りて空しく帰る勿れ (X)
165. 流れを汲みて水上を知る (X)
166. 宵工みの朝寝ぼう (X)
167. 欲には目なし (欲にきりなし、地獄に底なし p. 226)
168. 金持の貧乏人貧乏人の金持 (X)
169. 桃栗三年柿八年 (X)
170. 泥中の蓮 (X)
171. 渴に臨みて井を掘る (X)
172. 蛙の面に水 (X)

173. 禍は口より起こる (X)
174. 笑ふ門には福来る (X)
175. 濡れぬ先の傘 (X)
176. 我身抓りて人の痛さを知れ (X)
177. 地獄で仏 (地獄で仏に会ったよう p. 132)
178. 井の中の蛙大海を知らず (X)
179. 飛んで火に入る夏の虫 (X)
180. 問ふは当座の恥問はねば松代の恥 (X)
181. 玉に瑕<sup>きづ</sup> (X)
182. 論語読みの論語知らず (X)
183. 塵が積れば山となる p. 182
184. 馬の耳に風 (馬の耳に念仏 p. 64)
185. 牛は牛連れ馬は馬づれ (X)
186. 知らんが仏 (知らぬが仏 p. 149)
187. 稼ぐに追付貧乏なし (X)
188. 負うた子に教へられて浅瀬に渡る (X)
189. 万能足りて一心足らず (X)
190. 親の心子知らず (X)
191. 瓜の蔓には茄子はならぬ (X)
192. 仏を造り眼を入れず (仏造って魂入れず p. 210)
193. 念力岩をも通す (X)
194. 命にかへる宝なし (X)
195. 天知る地知る (X)
196. 胡椒丸呑み (X)
197. 身に余る嬉しさ (X)
198. 遭ふた時肩ぬげ (X)
199. 芥子の中に須弥山あり (X)
200. 大事の大事のお月さんを黒んぼが隠して赤んぼが月出した (X)

勝崎裕彦 (1992) 『仏教ことわざ辞典』 北辰堂 〈『通俗仏教：世諺百話』と勝崎 (1992) を比較〉

201. 一を以って萬を知る (X) 〈(X) は対応するものがなしの意〉
202. 袖の振り合ふも多生の縁 p. 121
203. 命は食にあり (X)
204. 後の百より今の五十 (X)

- 205. 味噌の味噌臭さは上味噌にあらず (X)
- 206. 叶わぬ時の神たのみ p. 58
- 207. さわらぬ神に崇なし (X)
- 208. 身を捨てこそ浮む瀬もあれ (X)
- 209. 身から出た錆 p. 88
- 210. 十分はこぼるる (X)
- 211. 獅子身中の蟲 (X)
- 212. 麻に連る蓬 (X)
- 213. 葬礼すみて医者ばかり p. 119
- 214. 九牛が一毛 (X)
- 215. 昨日の淵は今日の瀬となる (X)
- 216. 酒は百薬の長 (X)
- 217. 柳に雪折れなし (X)
- 218. 油断大敵 (X)
- 219. 何にもかも知りて赤子となる聖 (X)
- 220. 水に書をかくが如し (X)
- 221. 十人寄れば十腹 (X)
- 222. 人の身振り見て我が振り直せ (X)
- 223. 人に一癖 (X)
- 224. 百日の説法屁一つ p. 158
- 225. 一文惜しみの百知らず (X)
- 226. 蒔かぬ種は生きへぬ (X)
- 227. 来年のことをいはば鬼が笑う (X)
- 228. 一寸先は闇の夜 (X)
- 229. 転ばぬ先の杖 (X)
- 230. 子を持ちて知る親の恩 (X)
- 231. 食わず嫌ひ (X)
- 232. 光陰は矢の如し (X)
- 233. 後生大事や金ほしや死んでも命のあるやうに p. 74
- 234. 善は急げ p. 105
- 235. せいては事を仕損じる (X)
- 236. 猫に小判 p. 39
- 237. 運は天にあり (X)
- 238. 番町に居て番町知らず (X)

- 239. 今のは念仏誰も唱へる p. 216
- 240. 金持と灰吹は溜まる程きたない (X)
- 241. なるはいやなり思ふはならず (X)
- 242. 金言耳に逆う (X)
- 243. 熱さ忘れて影忘る (X)
- 244. 地獄の沙汰も金次第 p. 94
- 245. 後悔臍を噛む (X)
- 246. 心の鬼が身責る (X)
- 247. 故郷へ錦を飾る (X)
- 248. 過ちては改まるに憚る勿れ (X)
- 249. 会うは別れの始め p. 19
- 250. 命が物種 (X)
- 251. 恩を仇で報ずる p. 49
- 252. 仇を恩で報ずる (X)
- 253. 画餅飢に充たず (X)
- 254. 極楽とんぼ (X)
- 255. 驕るもの久しからず (X)
- 256. 魚ごろあれば水ごろあり (X)
- 257. 可愛い子には旅をさせよ (X)
- 258. 思ひ内にあれば色外に形はる (X)
- 259. 情けは人の為ならず p. 49
- 260. ならぬ堪忍するが堪忍 (X)
- 261. 月にむら雲花に風 p. 192
- 262. 楽しみは苦しみの基 (X)
- 263. 立鳥も跡を濁さず (X)
- 264. 宝の山に入りて空しく帰る勿れ (X)
- 265. 流れを汲みて水上を知る (X)
- 266. 宵工みの朝寝ぼう (X)
- 267. 欲には目なし p. 214
- 268. 金持の貧乏人貧乏人の金持
- 269. 桃栗三年柿八年 p. 226
- 270. 泥中の蓮 p. 137
- 271. 渴に臨みて井を掘る (X)
- 272. 蛙の面に水 (X)

- 273. 禍は口より起こる (X)
- 274. 笑ふ門には福来る (X)
- 275. 濡れぬ先の傘 (X)
- 276. 我身抓りて人の痛さを知れ (X)
- 277. 地獄で仏 p. 90
- 278. 井の中の蛙大海を知らず (X)
- 279. 飛んで火に入る夏の虫 (X)
- 280. 問ふは当座の恥問はねば松代の恥 (X)
- 281. 玉に瑕<sup>きづ</sup> (X)
- 282. 論語読みの論語知らず (X)
- 283. 塵が積れば山となる p. 135
- 284. 馬の耳に風 p. 39
- 285. 牛は牛連れ馬は馬づれ (X)
- 286. 知らんが仏 p. 113
- 287. 稼ぐに追付貧乏なし (X)
- 288. 負うた子に教へられて浅瀬に渡る (X)
- 289. 万能足りて一心足らず (X)
- 290. 親の心子知らず p. 77
- 291. 瓜の蔓には茄子はならぬ (X)
- 292. 仏を造り眼を入れず p. 181
- 293. 念力岩をも通す (X)
- 294. 命にかへる宝なし (X)
- 295. 天知る地知る (X)
- 296. 胡椒丸呑み (X)
- 297. 身に余る嬉しさ (X)
- 298. 遭ふた時肩ぬげ (X)
- 299. 芥子の中に須弥山あり (X)
- 300. 大事の大事のお月さんを黒んぼが隠して赤んぼが月出した (X)

須藤隆仙(1995)『仏教ことわざ事典』新人物往来社〈『通俗仏教：世諺百話』と須藤(1995)を比較〉

- 301. 一を以って萬を知る (X)
- 302. 袖の振り合ふも多生の縁 p. 50
- 303. 命は食にあり (X)
- 304. 後の百より今の五十 (X)

- 305. 味噌の味噌臭さは上味噌にあらず (X)
- 306. 叶わぬ時の神たのみ (X)
- 307. さわらぬ神に崇なし (X)
- 308. 身を捨てこそ浮む瀬もあれ p. 73
- 309. 身から出た錆 (X)
- 310. 十分はこぼるる (X)
- 311. 獅子身中の蟲 (X)
- 312. 麻に連る蓬 (X)
- 313. 葬礼すみて医者ばかり (X)
- 314. 九牛が一毛 (X)
- 315. 昨日の淵は今日の瀬となる (X)
- 316. 酒は百薬の長 (X)
- 317. 柳に雪折れなし (X)
- 318. 油断大敵 (X)
- 319. 何にもかも知りて赤子となる聖 (X)
- 320. 水に書をかくが如し (X)
- 321. 十人寄れば十腹 (X)
- 322. 人の身振り見て我が振り直せ (X)
- 323. 人に一癖 (X)
- 324. 百日の説法屁一つ p. 67
- 325. 一文惜しみの百知らず (X)
- 326. 蒔かぬ種は生きへぬ (X)
- 327. 来年のことをいはば鬼が笑う (X)
- 328. 一寸先は闇の夜 (X)
- 329. 転ばぬ先の杖 (X)
- 330. 子を持ちて知る親の恩 (X)
- 331. 食わず嫌ひ (X)
- 332. 光陰は矢の如し (X)
- 333. 後生大事や金ほしや死んでも命のあるやうに
- 334. 善は急げ (X)
- 335. せいては事を仕損じる (X)
- 336. 猫に小判 (X)
- 337. 運は天にあり (X)
- 338. 番町に居て番町知らず (X)

- 339. 今のは念仏誰も唱へる (X)
- 340. 金持と灰吹は溜まる程きたない (X)
- 341. なるはいやなり思ふはならず (X)
- 342. 金言耳に逆う (X)
- 343. 熱さ忘れて影忘る (X)
- 344. 地獄の沙汰も金次第 (X)
- 345. 後悔臍を噛む (X)
- 346. 心の鬼が身責る (X)
- 347. 故郷へ錦を飾る (X)
- 348. 過ちては改まるに憚る勿れ (X)
- 349. 会うは別れの始め p. 84
- 350. 命が物種 (X)
- 351. 恩を仇で報ずる (X)
- 352. 仇を恩で報ずる (X)
- 353. 画餅飢に充たず (X)
- 354. 極楽とんぼ (X)
- 355. 驕るもの久しからず (X)
- 356. 魚ごろあれば水ごろあり (X)
- 357. 可愛い子には旅をさせよ (X)
- 358. 思ひ内にあれば色外に形はる (X)
- 359. 情けは人の為ならず (X)
- 360. ならぬ堪忍するが堪忍 (X)
- 361. 月にむら雲花に風 (X)
- 362. 楽しみは苦しみの基 (X)
- 363. 立鳥も跡を濁さず (X)
- 364. 宝の山に入りて空しく帰る勿れ (X)
- 365. 流れを汲みて水上を知る (X)
- 366. 宵工みの朝寝ほう (X)
- 367. 欲には目なし (X)
- 368. 金持の貧乏人貧乏人の金持 (X)
- 369. 桃栗三年柿八年 (X)
- 370. 泥中の蓮 p. 209
- 371. 渴に臨みて井を掘る (X)
- 372. 蛙の面に水 (X)

- 373. 禍は口より起こる (X)
- 374. 笑ふ門には福来る (X)
- 375. 濡れぬ先の傘 (X)
- 376. 我身抓りて人の痛さを知れ (X)
- 377. 地獄で仏 (X)
- 378. 井の中の蛙大海を知らず (X)
- 379. 飛んで火に入る夏の虫 (X)
- 380. 問ふは当座の恥問はねば松代の恥 (X)
- 381. 玉に瑕<sup>きづ</sup> (X)
- 382. 論語読みの論語知らず (X)
- 383. 塵が積れば山となる p. 57
- 384. 馬の耳に風 (X)
- 385. 牛は牛連れ馬は馬づれ (X)
- 386. 知らんが仏 (X)
- 387. 稼ぐに追付貧乏なし (X)
- 388. 負うた子に教へられて浅瀬に渡る (X)
- 389. 万能足りて一心足らず (X)
- 390. 親の心子知らず (X)
- 391. 瓜の蔓には茄子はならぬ (X)
- 392. 仏を造り眼を入れず (X)
- 393. 念力岩をも通す (X)
- 394. 命にかへる宝なし (X)
- 395. 天知る地知る (X)
- 396. 胡椒丸呑み (X)
- 397. 身に余る嬉しさ (X)
- 398. 遭ふた時肩ぬげ (X)
- 399. 芥子の中に須弥山あり p. 36
- 400. 大事の大事のお月さんを黒んぼが隠して赤んぼが月出した (X)

4. 『通俗仏教：世諺百話』（守本恵観著、明治40（1906）年初版 法文館発行）と藤井乙男編（1953）『諺語大辞典』有朋堂、勝崎裕彦（1992）『仏教ことわざ辞典』北辰堂、須藤隆仙（1995）『仏教ことわざ事典』新人物往来社、『岩波ことわざ辞典』（2000、時田昌瑞著）、『岩波いろはカルタ辞典』（2004、時田昌瑞著）、『辞書から消えたことわざ』（2014、時田昌瑞著、角川新書）

本章では『通俗仏教：世諺百話』がほかの辞書ではどのように記述されているかを比較検討する。特に『岩波ことわざ辞典』（2000、時田昌瑞著）の現代のことわざに用例のないものは〈記述なし〉として注意した。

一 一を以って萬を知る（守本1906：83-85）

『岩波ことわざ辞典』（2000：60-61、時田昌瑞著）

「一を聞いて十を知る」

意味：物事の一端を聞いただけで全体のことを悟ってしまうように、如才にだけ洞察力が鋭いこと。

由来：『論語』（公治長）に由来するが、日本でも古くから異表現や類句が多い。江戸時代までの用例を整理してみた。

後ろの数字 「二」「八」「十」「百」「万」

前の数字 「一」「十」

後ろの動詞 「悟る」「知る」「察す」

前の動詞 「もちて」「もって」「聞いて」「打って」

後ろの動詞にはさらに命令形のものが加わる。

聖徳太子の伝記『上宮聖徳法王帝説』（奈良時代）「一を聞いて八を智る」

『今昔物語』（巻24）

「一事を聞きて十事を悟る」

『宇治拾遺物語』（巻14の11）

「一事を聞きて十事を知る」

日蓮の『報恩抄』

「一をもって万を察す」

江戸初期（基盤で）

「一を打って盤を知る」

『新猿楽記』（11世紀）

「一をもて万と成す」

二 袖の振り合ふも多生の縁

『岩波ことわざ辞典』（2000：339-400、時田昌瑞著）

「袖の振り合せも他生の縁」

「袖の振り合うも他生の縁」

「袖振り合わすも他生の縁」

御伽草子『蛤の草紙』（室町時代）「なさけなく人かな。物の行えをよく聞き給へ。袖のふり合わせも他生の縁と聞くぞかし」

仮名草子『竹斎』（巻上）（江戸初期）「一樹の蔭、一河の流れ、道行き振の袖の触れ合わせも、五百生の機縁」

近代：「袖すり合うも他生の縁」

意味：ちょっとした人との交わりも、単なる偶然によるものではなく、深い宿縁から生じているということ。

「他生」は前世あるいは来世の意。仏教観に基づくことわざ。道を歩いている時に見知らぬ人と袖が触れたくらいのささいなことでも、それは前世からの因縁によるということから。

勝崎裕彦（1992：122）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

Even a chance acquaintance is decreed by destiny.（偶然に知り合うことでさえ運命によって定められている）

### 三 命は食にあり

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

藤井乙男編（1953：105）『諺語大辞典』有朋堂

### 四 後の百より今の五十

『岩波ことわざ辞典』（2000：20-21, 時田昌瑞著）

「明日の百より今日の五十」

「明日の百より宵の五十」

「後百より今五十」

「後の百より今五十」

意味：どうなるか分からない未来にたくさん貰うより、少しでもいいから確実な今貰いたいという意。

教訓書『画本道の手引』（江戸後期）「小利口なる商人のごとし。大どりしやうより、小どりどり。出るいきの、入るもまたぬ世の中に、明日の百よりけふ五十とれ」

「後の千金より今の百文」

「末の百両より今の五十両」

「先の千両より今の十両」

「聞いた百文より見た一文」

「先の雁より手前の雀」

「先の雁より前の雲雀」

五 味噌の味噌臭さは上味噌にあらず

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

藤井乙男編（1953：950）『諺語大辞典』 有朋堂

「味噌の味噌臭きは食われず」

六 叶わぬ時の神たのみー 〈現代では使われなくなったことわざ〉

『岩波ことわざ辞典』（2000：430-431、時田昌瑞著）

「嘆きの中の喜び」

「悲しみの中の喜び」

仏教説話『三宝絵』（平安時代）

説話『沙石集』 卷2（鎌倉時代）「疑いなく不動の御方便によりて、菩提の道に趣き給ひぬらんと、門徒の歎の中に悦あへり」

勝崎裕彦（1992：59）『仏教ことわざ辞典』 北辰堂

The wish is father to the thought.（願望は想念の父）

七 さわらぬ神に崇なし

『岩波ことわざ辞典』（2000：272-273、時田昌瑞著）

「触らぬ神に崇りなし」

「参らぬ神に崇りなし」

「崇」は、神仏が意に反する人間の行為に下す咎め

「触らぬ神」は、神様と接触をもたないこと。

八 身を捨てこそ浮む瀬もあれ

『岩波ことわざ辞典』（2000：576-577、時田昌瑞著）

意味：一身を投げ打つ覚悟で事に当たってはじめて成就も可能であるというたとえ。

空也上人「大水の先に流るるともがらも。身を捨ててこそ浮かむなれ。」

九 身から出た錆

『岩波ことわざ辞典』（2000：564、時田昌瑞著）

「身から出したる錆」

「身より出せる錆」

意味：自ら犯した悪行のために、自分に災いが生じて苦しむことのたとえ。

人間の「身」を刀の「身」になぞらえていると見ることができよう。

勝崎裕彦（1992）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

The stone you throw will fall on your head.（君が投げる石は君自身の頭に当たる）

十 十分はこぼるる

『岩波ことわざ辞典』（2000：302-303、時田昌瑞著）

「十分はこぼれる」

意味：あまり過大な欲はかかずに、物事は少し足りないくらいがほどほどでよいこと。

十一 獅子身中の蟲

『岩波ことわざ辞典』（2000：283、時田昌瑞著）

「獅子身中の虫」

意味：（1）仏に仕える身でありながら仏法に害をなす者の意。

（2）内部から災いを引き出すもののこと。

（3）恩に対して仇で返すこと。

法然『消息文』「獅子の身の中の虫」

十二 麻に連る蓬—〈江戸時代には多用されたが現在では忘れかけられようとしている〉

『岩波ことわざ辞典』（2000：16-17、時田昌瑞著）

「麻の中の蓬」

「麻につるる蓬」

「麻につるる蓬は真直ぐに育つ」

意味：善い人に交わればその人に感化され、特に教育をしなくても善人になるというたとえ。

十三 葬礼すみて医者ばかり

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

勝崎裕彦（1992：119）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

「葬式済んで医者話」

「葬式帰りの医者話」

意味：すべてのことが終わってから、過去に決定した議論や判断の蒸し返しをすること。

After death the doctor.（死んだ後に医者）

When a thing is done advice comes too late.（終わったあとの忠告では遅すぎる）

十四 九牛が一毛

「九牛が一毛」

『岩波ことわざ辞典』（2000：199、時田昌瑞著）

意味：大多数の中のごく一部を言うたとえ。九頭の牛の中のたった一本の毛をなぞらえたもの。

十五 昨日の淵は今日の瀬となる

「昨日の淵は今日の瀬」

『岩波ことわざ辞典』（2000：196-197、時田昌瑞著）

「淵は瀬となる」

意味：世の中の変遷・栄枯盛衰がはげしいことのたとえ。

「昨日の楽しみ今日の悲しみ」

「昨日の花は今日の夢」

「昨日の花は今日の塵」

「昨日の大尽今日の乞食」（大尽＝金持ち）

十六 酒は百薬の長

『岩波ことわざ辞典』（2000：268-269、時田昌瑞著）

意味：適量をたしなむ酒は、どんなにすぐれた薬より効目があること

逆のことわざ：「酒は百害の長」

十七 柳に雪折れなし

『岩波ことわざ辞典』（2000：605、時田昌瑞著）

「柳の枝に雪折れなし」

「柳に風折れなし」

意味：柔軟に対応できるものはきつい試練にも耐えることができるというたとえ。

十八 油断大敵

『岩波ことわざ辞典』（2000：617-618、時田昌瑞著）

「油断は大敵の基」

「油断は大敵」

「油断強敵」

意味：気のゆるみや不注意は、失敗の原因となるから大きな敵だということ。

十九 何にもかも知りて赤子となる聖

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

二十 水に書をかくが如し

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

参考：

『岩波ことわざ辞典』（2000：566、時田昌瑞著）

「水に絵を描く」

藤井乙男編（1953：956）『諺語大辞典』 有朋堂

「水に文字書く」

二十一 十人寄れば十腹

『岩波ことわざ辞典』（2000：301、時田昌瑞著）

「十人十色」

「十人寄れば十色」

意味：人の好み考えはみな違うというたとえ

『毛吹草』（1645）「十人寄れば十国の者」

浄瑠璃『傾城三度笠』（1713）「十人寄ればとりどり」

洒落本『令子部屋』（1785）「百人百色」

洒落本『契情買猫の巻』（1799）「十人寄れば十人違う」

滑稽本『浮世床』（1814）「十人が十種」

人情本『清談若緑』（1835）「十人十色」

人情本『秋色絞朝顔』（1835）「十人よれば十色」

『滑稽新聞』（1906）明治時代「十人十腹」（これは、長続きしなかった）

二十二 人の身振り見て我が振り直せ

『岩波ことわざ辞典』（2000：508、時田昌瑞著）

「人の振り見て我振り直す」

意味：他人の行動の良い悪いを見て、自分の行いを振返り、改める材料にすること。

「直せ」命令形の用法も少なくない

二十三 人に一癖

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

藤井乙男編（1953：850）『諺語大辞典』 有朋堂

意味：人ごとに1つの癖があること。

#### 二十四 百日の説法屁一つ

『岩波ことわざ辞典』（2000：517-518、時田昌瑞著）

「七日の説法屁一つ」

意味：長い間の苦勞が、わずかな失敗ですべてぶち壊しになることのたとえ。

勝崎裕彦（1992：159）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

The friar preached against stealing and had a goose in his sleeve.（修道士は盗むなかれと説教しながら、ガチョウを袖の中に隠して持っていた）

#### 二十五 一文惜しみの百知らず

『岩波ことわざ辞典』（2000：59-60、時田昌瑞著）

「一文惜しみの百損」

「一文惜しみの百失い」

意味：当面するわずかな金を惜しんで、のちのちに大きな損をすること。

「一文儲けの百失い」

「安物買の銭失い」

#### 二十六 蒔かぬ種は生きへぬ

『岩波ことわざ辞典』（2000：556-557、時田昌瑞著）

「蒔かぬ種は生えぬ」

「蒔かぬ種は生えず」

意味：（1）原因なくして結果はありえないこと

（2）何もしないでよい結果を期待しても叶わないというたとえ。

#### 二十七 来年のことをいはば鬼が笑う

『岩波ことわざ辞典』（2000：630-631、時田昌瑞著）

「来年のことを言うと鬼が笑う」

意味：あすのことも分からないのに、一年も先のことをあれこれ言ったも仕方がないというたとえ。

#### 二十八 一寸先は闇の夜

『岩波ことわざ辞典』（2000：64-65、時田昌瑞著）

「一寸先は闇」

意味：未来のことは、たとえ明日のことでもどうなるか分からないということのたとえ。

二十九 転ばぬ先の杖

『岩波ことわざ辞典』（2000：64-65、時田昌瑞著）

「倒れぬ先の杖」

意味：あらかじめ準備を整え、失敗をしないようにすることのたとえ。

三十 子を持ちて知る親の恩

『岩波ことわざ辞典』（2000：259-260、時田昌瑞著）

「子を持って知る親の恩」

意味：自らが親になってみた時、親のありがたさが分かるということ。

三十一 食わず嫌ひ

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

藤井乙男編（1953：342）『諺語大辞典』有朋堂

意味：物事を試みずして、ひたすら嫌悪するをいう。

三十二 光陰は矢の如し

『岩波ことわざ辞典』（2000：236-237、時田昌瑞著）

「光陰矢のごとし」

意味：月日の過ぎるのは早く、しかも二度と戻らぬこと。

中国『禪門諸祖解掲頌』「光陰箭の如し」

日本『曾我物語』（巻七）「光陰矢のごとく」（南北朝）

三十三 後生大事や金ほしや死んでも命のあるやうに

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

藤井乙男編（1953：403）『諺語大辞典』有朋堂

意味：人の貪欲深さをいう。

勝崎裕彦（1992：74）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

「後生大事や金ほしや地獄に落ちて鬼に負けるな」

意味：あれもこれもと欲深く、欲の皮をつっぱるようなことはよくない。

The best way to travel is towards heaven. （一番よい旅の仕方は天国への旅である）

「後生を願う」

三十四 善は急げ

『岩波ことわざ辞典』（2000：236-237、時田昌瑞著）

「吉事は急げ」

意味：善いと思ったことは即座に実行せよということ。

〈善〉 1) 人や社会への善行とする見方

2) 自分にとってよいもの、好都合なものといった意

Cf. 「思い立ったが吉日」

勝崎裕彦（1992：105）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

As good soon as syne. （後でよりも今すぐの方がよい）

三十五 せいては事を仕損じる

『岩波ことわざ辞典』（2000：330、時田昌瑞著）

「急いては事をし損ずる」

「急いては事を過つ」

意味：あせって物事をやると失敗してしまうということ。

三十六 猫に小判

『岩波ことわざ辞典』（2000：455-456、時田昌瑞著）

「猫に丁銀」

「猫に銭」

「猫に小判を見せる」

意味：どんなに高価で貴重なものでも、その価値を知らない者には何の意味もありがた味もないというたとえ。

「猫に石仏」

「犬に小判」

「馬に小判」

勝崎裕彦（1992：39）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

A nod is as good as a wink to a blind horse. （目の悪い馬には背いて目くばせしても同じことである）

三十七 運は天にあり

『岩波ことわざ辞典』（2000：104-105、時田昌瑞著）

「運を天に任す」

意味：事態の成行きを天の意向にゆだねること。

『平家物語』「運を天道に任す」

『太平記』「運命を天に任す」

三十八 番町に居て番町知らず

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

藤井乙男編（1953：823）『諺語大辞典』有朋堂

意味：江戸麹町番町の地理まぎらわしく知れ難きよりいう。

三十九 今のは念仏誰も唱へる

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

藤井乙男編（1953：111）『諺語大辞典』有朋堂

意味：死に臨みて、神仏の助けを求むるは人の常情にして、強壯の時に信心するものは稀なり。

勝崎裕彦（1992：216）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

「いまわの念仏誰でも唱える」

意味：平素は信仰心のなかったものまでが、死ぬときには思わず「南無阿弥陀仏」を唱えることになる。

Cf.「臨終の一念は生を引く」

四十 金持と灰吹は溜まる程きたない

『岩波ことわざ辞典』（2000：175-176、時田昌瑞著）

意味：金持は財産を殖やすほどけちになるというたとえ。

「金持と痰壺は溜まるほど汚い」

「掃溜めと金持は溜まるほど汚い」

「金持と塵取は溜まるほど汚い」

〈近世での使用例は極めて少ない〉

四十一 なるはいやなり思ふはならず

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

四十二 金言耳に逆う

『岩波ことわざ辞典』（2000：210、時田昌瑞著）

「忠言耳に逆らう」

意味：金言の言葉は正しすぎてむしろ反発を感じ、まともに聞きいれにくいこと。

「金言」は、仏教では仏の口からでた尊い言葉

道元：『正法眼蔵』「忠言の逆耳する」

四十三 熱さ忘れて影忘る

『岩波ことわざ辞典』（2000：26-27、時田昌瑞著）

「暑さ忘れりゃ陰忘れる」

意味：苦難が過ぎ去ると、その時に助けてくれた人の恩は忘れてしまうこと。

四十四 地獄の沙汰も金次第

『岩波ことわざ辞典』（2000：282-283、時田昌瑞著）

「地獄の沙汰も金がする」

「地獄の沙汰も金次第」〈16世紀から〉『犬筑波集』「聞ばただ地獄のさたも金なれや」

意味：金はどんなことでも可能にするというたとえ。

「阿弥陀の光も金次第」〈江戸時代から〉

〈すでに江戸時代以前に金が社会を支配する状況が存在していた〉

勝崎裕彦（1992：94）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

Jack would be a gentleman if he had money.（金さえあればこの馬でも紳士になれる）

四十五 後悔臍を噛む

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

藤井乙男編（1953：385）『諺語大辞典』有朋堂

「<sup>ほぞ</sup>臍をかむ」の條をみよ。

『岩波ことわざ辞典』（2000：237、時田昌瑞著）

「後悔先に立たず」

意味：物事がすんでしまってから、悔やんだり残念がってもどうにもならないの意。

四十六 心の鬼が身責る

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

藤井乙男編（1953：396）『諺語大辞典』有朋堂

意味：良心に責めらるるをいう。

四十七 故郷へ錦を飾る

『岩波ことわざ辞典』（2000：243、時田昌瑞著）

「故郷へは錦を着て帰れ」

「故郷へは錦を着る」

「故郷へ錦」

「帰るには錦着て行く」

意味：立身出世を遂げて故郷へ帰ること。

「錦」：最上の織物

#### 四十八 改まるに憚る勿れ

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

#### 四十九 会うは別れの始め

『岩波ことわざ辞典』（2000：4、時田昌瑞著）

「会うは別れ」

「会うは別れの基」

「会う者は別れる定め」

意味：出会った者同士には、いつか必ず別れの時がくるのがこの世の定めだということ。

仏典『大般涅槃経』「世皆常無し、会えば必ず離るること有り」〈仏教の無常観〉

勝崎裕彦（1992：19）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

The best of friends must part.（一番良い友人同士でもかならず別れがある）

#### 五十 命が物種

『岩波ことわざ辞典』（2000：71、時田昌瑞著）

「命あつての物種」

「命は物種」

「命こそ物種」

意味：何事にせよ命があればこそで、命はすべての元だということ。

平安時代、仏教説話『法華験記』「命は一生の財」

#### 五十一 恩を仇で報ずる

『岩波ことわざ辞典』（2000：147-148、時田昌瑞著）

「恩を仇で返す」

「恩を仇で報う」

「恩を仇」

「恩を恨みで返す」

意味：恩恵を与えてくれた人に、逆に害を与える意。

勝崎裕彦（1992：49）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

A beggar pays a benefit with a louse. (乞食は恩恵を受けるとしらみで返礼する)

五十二 仇を恩で報ずる

『岩波ことわざ辞典』(2000：148、時田昌瑞著)

意味：害を受けた相手に恩義で返すの意。

「恩を以って仇を報ず」

説教節『小栗判官』「恩は恩、仇は仇で報ずべし」

五十三 画餅飢に充たず

『岩波ことわざ辞典』(2000：108、時田昌瑞著)

「絵に描いた餅」

「絵に描いた餅は食えぬ」

「絵に描いた餅飢えを癒さず」

意味 (1) 形はあるものの実際には何の役にも立たないことのたとえ。

(2) 計画や企画だけでは立派だが、実行が伴わないという意。

〈古くは画餅といい昔の中国の文献に載っている〉

〈(2) の意で、新聞の社説などによく使われている〉

五十四 極楽とんぼ

『岩波ことわざ辞典』(2000：時田昌瑞著) 〈記述なし〉

藤井乙男編 (1953：390) 『諺語大辞典』 有朋堂

意味：のらくら者をいう。

五十五 驕るもの久しからず

『岩波ことわざ辞典』(2000：119、時田昌瑞著)

「奢る者は久しからず」

「奢れる人も久しからず」

「奢る平家は久しからず」

意味：他人を軽んじて自分を絶対と思っている者の栄華は、長くは続かないということ。

五十六 魚ごころあれば水ごころあり

『岩波ことわざ辞典』(2000：119、時田昌瑞著)

「魚心あれば水心」

「魚心あれば水心あり」

「魚心あれば水」

「水心あれば魚心」

意味：（１）相手が自分に好意をもてば、こちらも相手に好意をもつものだというたとえ。

（２）自分の方が相手に好意を持てば、相手の方もこちらに好意をもって良好な関係を結ぶことができる意。

五十七 可愛い子には旅をさせよ

『岩波ことわざ辞典』（2000：183-184、時田昌瑞著）

「可愛い子には旅」

「いとおしき子には旅をさせよ」

「思う子には旅をさせよ」

意味：子供を愛しているのならば、目先の情愛にとらわれることなく、子供を厳しく鍛えよという意。

五十八 思ひ内にあれば色外に形はる

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

久原茂（1917：82）『俚諺通解』東京：富田文陽堂（大正時代）

藤井乙男編（1953：201）『諺語大辞典』有朋堂

Love and smoke can not be hidden.

五十九 情けは人の為ならず

『岩波ことわざ辞典』（2000：431-432、時田昌瑞著）

意味：他人に情をかけておくと、それがいつか自分のためになるということ。

「人の為にならず」→へたに人に情をかけて助けるのはその人の為にならず、自立をさまたげることだ〈昭和30年代から〉

勝崎裕彦（1992：222）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

There is kindness to be found everywhere.（親切な人はどこにでもいる）

六十 ならぬ堪忍するが堪忍

『岩波ことわざ辞典』（2000：437-438、時田昌瑞著）

意味：これ以上は我慢できないというところを堪えるのが真の我慢だという意。

六十一 月にむら雲花に風

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

勝崎裕彦（1992：192）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

「月に叢雲花に風」

「月に雲」

「月に叢雲」

意味：好ましいことには故障や妨害がつきもの

藤井乙男編（1953：257）『諺語大辞典』有朋堂

「魔が差す」

Fortune is made of glass.（幸運はガラス製である）

#### 六十二 楽しみは苦しみの基

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

藤井乙男編（1953：609）『諺語大辞典』有朋堂

「楽は悲の基」

#### 六十三 立鳥も跡を濁さず

『岩波ことわざ辞典』（2000：358-359、時田昌瑞著）

「立つ鳥跡を濁さず」

「飛ぶ鳥跡を濁さず」

意味：（１）自分が立ち去った跡が見苦しくないようにきちんとしておくこと。

（２）引き際が清らかであることのたとえ。

#### 六十四 宝の山に入りて空しく帰る勿れ

『岩波ことわざ辞典』（2000：354、時田昌瑞著）

「宝の山に入りながら手を空しくする」

「宝の山に入りながら空しく帰る」

「宝の山に入りて手を空しくする」

意味：大きな利益を得られる絶好の機会に、なにも得ずに終ることのたとえ。

源信『往生要集』「宝の山に入りて手を空しくして帰ることなかれ」

#### 六十五 流れを汲みて水上を知る

『岩波ことわざ辞典』（2000：354、時田昌瑞著）

「流れを汲みて源を知る」

「流れを汲みて源を尋ねる」

意味：（１）ものの末を見て源を推し量ることのたとえ

(2) 人の行為を見れば、その人の心根を察することができることのたとえ。

仏書『摩訶止観』(巻一)

六十六 宵工みの朝寝ぼう

『岩波ことわざ辞典』(2000：620-621、時田昌瑞著)

「宵っ張りの朝寝坊」

「宵ばれの朝寝こき」

「夜ふかしの朝寝坊」

意味：夜更かしをして朝起きることができないこと、また、そうした人のこと。

六十七 欲には目なし

『岩波ことわざ辞典』(2000：時田昌瑞著)〈記述なし〉

『岩波ことわざ辞典』(2000：623、時田昌瑞著)

「欲に頂なし」

「欲に限りなし」

意味：欲には限度というものがないことのたとえ。

勝崎裕彦(1992：214)『仏教ことわざ辞典』北辰堂

「欲に目がくらむ」

六十八 金持の貧乏人貧乏人の金持

『岩波ことわざ辞典』(2000：時田昌瑞著)〈記述なし〉

藤井乙男編(1953：257)『諺語大辞典』有朋堂

意味：足ることを知らざれば常に貧しく足ることを知れば、心の安きこと長者のごとし。

六十九 桃栗三年柿八年

『岩波ことわざ辞典』(2000：598、時田昌瑞著)

「桃栗三年柿八年、柚は九年」

「桃栗三年柿八年、梅は酸いとて十八年」

意味：どんなものにもそれ相応の年数があるものだということ。

七十 泥中の蓮

『岩波ことわざ辞典』(2000：394、時田昌瑞著)

「泥のうちの蓮」

意味：周囲の汚れた環境に影響されずに、清らかさを保つことのたとえ。

仏典：『維摩經』

勝崎裕彦（1992：137）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

A myrtle among thorns is a myrtle still. (茨の中に生えていてもギンバイカはやはりギンバイカ)

七十一 渴に臨みて井を掘る

『岩波ことわざ辞典』（2000：166、時田昌瑞著）

「渴して井戸を穿つ」

「渴に臨みてにわかに井を掘る」

意味：起こった事態への対処が手遅れであることのたとえ。

七十二 蛙の面に水

『岩波ことわざ辞典』（2000：151、時田昌瑞著）

「蛙の面に水かくる」

「蛙の背中に水」

「蛙の面へ小便」

意味：どんなことをされても平然としているたとえ。

七十三 禍は口より起こる

『岩波ことわざ辞典』（2000：609-610、時田昌瑞著）

「病は口から入り、禍は口から出る」

「禍は口から出る」

意味：病気は食べ物を通してかかり、災難は自分の話す言葉によって起こるものということ。

七十四 笑ふ門には福来る

『岩波ことわざ辞典』（2000：609-610、時田昌瑞著）

「笑う門に福来る」

「笑う所へ福来る」

「笑う家に福来る」

意味：苦難な状況にあっても希望をもって頑張っていれば、幸せをもたらすことができるということ。

七十五 濡れぬ先の傘

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

藤井乙男編（1953：766）『諺語大辞典』有朋堂

意味：転ばぬ前の杖に同じ。

七十六 我身抓りて人の痛さを知れ

『岩波ことわざ辞典』（2000：648、時田昌瑞著）

「我が身をつねって人の痛さを知れ」

「我が身をつめって人の痛さを知れ」

「我が身をつんで人の痛さを知れ」

「我が身をつめりて人の痛さを知れ」

意味：他人の苦しみや痛みは自分の身に置き換えて思いやれということ。

七十七 地獄で仏

『岩波ことわざ辞典』（2000：281、時田昌瑞著）

「地獄で仏に逢ったよう」

「地獄で地蔵に逢う」

意味：困り果てている時などに、思いがけない助けにあることのたとえ。

勝崎裕彦（1992：90）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

The devil is never far off.（悪魔は遠いところにはいない）

七十八 井の中の蛙大海を知らず

『岩波ことわざ辞典』（2000：72、時田昌瑞著）

「井のうちの蛙」

「井の中の蛙」

「井のものと蛙」

「井戸の中の蛙」

意味：自己の知識や考えが最高だと思い込み、ほかにもっと深い考えや知恵のあることを知らない意。世間知らずのたとえ。

法然：『消息文』

仏教説話（鎌倉時代）『宝物集』「井底のかはづが大海を見ず」

七十九 飛んで火に入る夏の虫

『岩波ことわざ辞典』（2000：423、時田昌瑞著）

「夏虫の火に入るごとし」

意味：自分からわざわざ危険な目に逢うことのたとえ。

鎌倉時代、法語『妻鏡』「夏虫の色に耽りて焰に入る」

八十 問ふは当座の恥問はねば松代の恥

『岩波ことわざ辞典』（2000：192、時田昌瑞著）

「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」

「問うは一時の恥、問わざるは末代の恥」

「問う当座の恥、問わぬは一期の恥」

意味：知らないものを人に聞くのはその場で恥しい思いをするだけだが、聞かずに知らないまま過ごすのは、一生恥しい思いをしなくてはならないということ。

八十一 玉に瑕<sup>きづ</sup>

『岩波ことわざ辞典』（2000：369、時田昌瑞著）

意味（１）完全と思われる中にある、ごく小さな欠点のたとえ

（２）立派なものの中にある惜しまれるべき一つの欠陥のたとえ。

八十二 論語読みの論語知らず

『岩波ことわざ辞典』（2000：643-644、時田昌瑞著）

意味：（１）書物の内容は理解できても、実行が伴わないことのたとえ。

（２）そうした人を嘲る言葉

八十三 塵が積れば山となる

『岩波ことわざ辞典』（2000：383、時田昌瑞著）

「塵積って山となる」

「微塵も積もれば山となる」

意味：ほんのわずかな物でも積み積み積れば大きなものになるというたとえ

仏書：『大智度論』（卷九九）

勝崎裕彦（1992：136）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

Many a little makes a mickle; Many a mickle makes a muchle; Many a little makes a great;

Many a pickle makes a mickle.（小さなものがたくさんになれば大きくなる）

八十四 馬の耳に風

『岩波ことわざ辞典』（2000：96、時田昌瑞著）

「馬の耳に念仏」

「馬の耳に念仏勧めるよう」

「馬に念仏」

意味：何の効果もなく無駄なことのたとえ。

〈「風」形は、江戸時代に常用された。「念仏」形はずっと後で文献に見える。江戸中期以降〉

勝崎裕彦（1992：39）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

To sing psalms to a dead horse.（死んだ馬に讃美歌を歌って聞かせる）

久原茂（1917：132）『俚諺通解』東京：富田文陽堂（大正時代）

「馬の耳に風」

八十五 牛は牛連れ馬は馬づれ

『岩波ことわざ辞典』（2000：87、時田昌瑞著）

「牛は牛連れ」

「馬は馬連れ、牛は牛連れ」

意味：（1）似たもの同士や同類は、自然と集うようになること。

（2）自分に相応の相手と一緒に事を行うとうまくゆくこと。

八十六 知らんが仏

『岩波ことわざ辞典』（2000：311、時田昌瑞著）

「知らぬが仏」

「知らぬが仏、見ぬが極楽」

「知らぬが仏、見ぬ神」

意味：（1）真実や真相を知らなければ、仏のように穏やかにしていられる意

（2）実態やことの重要性を知らずにのほほんとしている人を嘲笑う言葉

八十七 稼ぐに追付貧乏なし

『岩波ことわざ辞典』（2000：162、時田昌瑞著）

「稼ぐに貧乏追いつかず」

意味：一生懸命に働けば貧乏になることはないという意

Cf. 稼ぐに追付貧乏神

八十八 負うた子に教へられて浅瀬に渡る

『岩波ことわざ辞典』（2000：113、時田昌瑞著）

「負うた子に教えられ」

「三つ子に習いて浅い瀬を渡る」

意味：自分より未熟な年下の者や劣った者に教えられることのたとえ。

八十九 万能足りて一心足らず

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

九十 親の心子知らず

『岩波ことわざ辞典』（2000：137、時田昌瑞著）

意味：（１）子を思う親の深い気持を知らずに、子供が勝手気ままに振舞う意。

（２）親にならなければ、親たる者の気持は推し量れるものではないということ。

Cf. 子の心親知らず

九十一 瓜の蔓には茄子はならぬ

『岩波ことわざ辞典』（2000：101-102、時田昌瑞著）

「瓜の蔓には茄子」

意味：（１）血筋は争えず、非凡な子は平凡な親からは産まれないということ

（２）原因なくして結果はあり得ないことのたとえ。

九十二 仏を造り眼を入れず〈江戸中期以前に広く知られていた形〉

『岩波ことわざ辞典』（2000：550-551、時田昌瑞著）

「仏を造って魂入れず」〈江戸中期以降の形〉

意味：物事のだいたいを果たしながら、最も大事な点をなおざりにすることのたとえ。

〈眼を入れることは魂をいれることを意味した〉

勝崎裕彦（1992：182）『仏教ことわざ辞典』北辰堂

Ploughing the field and forgetting the seeds.（畑を耕すことは知っていても、種を播くことを知らない）

久原茂（1917：53）『俚諺通解』東京：富田文陽堂（大正時代）

「仏を造って霊入れず」

九十三 念力岩をも通す

『岩波ことわざ辞典』（2000：464、時田昌瑞著）

「一心岩をも通す」

「思う念力岩をも徹す」

「一念岩をも通す」

意味：何事も一心不乱に行えばなし遂げることができるというたとえ。

九十四 命にかへる宝なし

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

藤井乙男編（1953：104）『諺語大辞典』有朋堂

「命に換ふる宝なし」

九十五 天知る地知る

『岩波ことわざ辞典』（2000：400、時田昌瑞著）

「天知る地知る我知る人知る」

意味：悪事や不正は必ず露顕するものだという戒め

仏教説話『日本霊異記』（巻上）（平安時代）

九十六 胡椒丸呑み

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

藤井乙男編（1953：962）『諺語大辞典』有朋堂

意味：咀嚼して真味をもとめざる喩。

久原茂（1917：195）『俚諺通解』東京：富田文陽堂（大正時代）

「胡椒丸のみのやう」

九十七 身に余る嬉しさ

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

藤井乙男編（1953：962）『諺語大辞典』有朋堂

「身に余る」

意味：喜悦感謝の情の、一身に収めかねて、溢れいづるをいう。

九十八 遭ふた時肩ぬげ

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

九十九 芥子の中に須弥山あり

『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

藤井乙男編（1953：371）『諺語大辞典』有朋堂

意味：小なる者の中に大なる者を包蔵するをいう。

須藤隆仙（1995：36）『仏教ことわざ事典』新人物往来社

「芥子粒（けしつぶ）に須弥（＝大山）を入れる」

意味：須弥は須弥山という仏教語で、芥子粒はきわめて細かい物の例え。全く無理な話の他例え。

百 大事の大事のお月さんを黒んぼが隠して赤んぼが月出した  
『岩波ことわざ辞典』（2000：時田昌瑞著）〈記述なし〉

終わりに

本研究では、守本恵観著（1906）『通俗仏教：世諺百話』（明治40年初版）京都：法文館に載せられた明治期のことわざと仏教との接点をもとめるために、時間軸にそって、よく似たことわざの異形を収集し、その表現が現代のものと違っていたり、現代のことわざには対応するものがなかったり、意味が不明のものなどもあった。通俗仏教が明治期にどのようなものを考えていたかを、すこしは、この研究で知ることができたように思う。

#### 参考文献

- 勝崎裕彦（1992）『仏教ことわざ辞典』東京：北辰堂  
北村孝一ほか（2005：2-3）『ことわざ資料叢書第3集第6巻』東京：クレス出版  
久原茂（1917）『俚諺通解』東京：富田文陽堂  
須藤隆仙（1995）『仏教ことわざ事典』東京：新人物往来社  
時田昌瑞著（2000）『岩波ことわざ辞典』東京：岩波書店  
時田昌瑞著（2004）『岩波いろはカルタ辞典』東京：岩波書店  
時田昌瑞著（2014）『辞書から消えたことわざ』東京：角川新書  
東森勲（2016）「日英語ことわざの語用論的等価を求めて」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第25号、63-86.  
東森勲（2018a）『翻訳と語用論』第3章翻訳とことわざ、東京：開拓社  
東森勲（2018b）「日本語ことわざの拡張用法・もじりの解釈について」『日本言語文化研究』23号  
藤井乙男編（1953）『諺語大辞典』東京：有朋堂  
守本恵観著（1906）『通俗仏教：世諺百話』（明治40年初版）京都：法文館  
割田剛雄（2012）『仏教ことわざ辞典』東京：パイインターナショナル